

安酸敏眞氏の「^{いま}現在、あらためて《人文学》を問う」を読んで

新 川 登 亀 男

Comment on Prof. Yasukata Toshimasa's Report

Tokio SHINKAWA

このたびの重要なシンポジウムにうかがえず、申し訳ありません。ただ、事前に、安酸敏眞先生のご報告原稿を拝読することができました。大変興味深いもので、多くの教唆を得ることができました。感謝申し上げます。そこで、この原稿に導かれながら、若干の私見を述べさせていただきたいと思えます。

私たちの大きな研究課題は、「人文学」の現状認識と、将来への可能性を切り拓くことにあります。しかし、「学」とは言っても、「人文学」という特定の学問体系や方法があるわけではありません。また、大学制度上、「人文学部」「人文学科」等がありますが、これらの呼称は、「法文学部」「文理学部」等の呼称について弁明することとは異なる説明が求められるでしょう。

さらに、「人文」という漢語の側面からみると、日本の場合、天平勝宝3年(751)にまとめられた漢詩集の『懐風藻』序文が早期の使用例です。それによると、「天造」に対比させて「人文」と述べています。このような対比は、『周易』が説く「天文」と「人文」との対比に倣ったものです。つまり、「天」に由来する創造現象に対して、「人」の営為現象を「人文」というのですが、そこには、「天」と区別されることではじめて意義をもつ「人」が立ち現れてきます。

では、「文」は、どのように考えられていたのでしょうか。さきの『懐風藻』序文は、次のように述べています。すなわち、「風」と「俗」をととのえ、

教化するには「文」が必要であり、「徳」を身に着けるには「学」が必要である。この両者が合わさって「庠序」(しょうじょ:学校)が誕生するのである、と。この説明は、「文」の意義を説くだけでなく、「文学」ひいては学校(大学)論にも及びます。この論は、「文武」の「武」と区別される「文」の成り立ちにもかかわるでしょう。

ところが、日本と中国では異なるところがあります。「天」と「人」との区別については、一応共通していますが、日本で言う「文武両道」とは異なる「文武の道」が中国にはあります。それは、『論語』にも説かれているように、周の文王と武王が伝えた道を指しています。さらに、同じ『論語』にもあるように、「文」と「質」とを対比させます。つまり、装飾であり「あや」である「文」が、質朴である「質」に勝てば「史」になり、「質」のほうが「文」にまされば「野」になるというのです。したがって、「文」と「質」との適切な調和が必要であると説いています。これは、「文」の本源を「あや」(模様)に求めた好例であり、その「文」が優勢であると「史」に行きつくというのは、興味深い論です。なぜなら、「歴史」記述や編纂の正体が問われてくるからです。

以上、「人文」という漢語の早い使用例には、すでに多くの問題が含まれています。「人」と「天」の区別。「文」と「武」の区別。「文」と「質」の区別などです。また、同じ漢語や漢字の意味にしても、日中間の違いや、濃淡の差異もあります。しかし、基本的な問題として取り上げるべきは、「人文」ひ

いては「人」「文」が、つねに何かとの対比によって相対的に認識されているということであり、絶対的な孤高の概念ではないということです。

その後、「人文」という漢語は、近代にも多用されています。西周の『百一新論』や夏目漱石の『吾輩は猫である』、あるいは「皇室典範および帝国憲法制定に関する御告文」などの例がよく知られています。これらには、あらたな翻訳語として生まれ変わった側面があるようですが、さきの『懐風藻』序文の使用例を継承した側面も見出せます。さらに、1945年の敗戦後、文化主義や平和主義の思潮と軌を一にして、「人文」という用語が文脈を異にしながらいよいよ台頭してきたように思われます。そして、この変動の近現代においてこそ、「人文」に「学」を付して「人文学」という概念と雰囲気を作り出したのではないのでしょうか。

しかし、その新たな「人文学」とは何かという回答は、「人文」への回答と合わせて、けっして容易に出せるものではありません。また、画一的でもありません。ただ、少なくとも言えるのは、①何かと対比させられる相対的な概念であること。②その対比には多様性があること。一方、③歴史の投影として創出される歴史的な概念でもあること。④「人文」に「学」を付して「人文学」としたのは、近現代に入ってからであること。⑤前近代の「人文」用語と、あたらしい「学」用語との近現代的な連結には、不協和音が拭えず、「人文」は「学」になるのかという不確実性や不安がつきまとうこと、です。

実は、早稲田大学文学部にも、かつて「人文専修」と命名されたコースがありました。優秀な学生が多く集まりましたが、教員は、主として既存の専修(哲・文・史)からそれぞれ「出向」しておりました。その意味では、「起学」的な要素をもつ新鮮な専修でしたが、さまざまな意味において曖昧さを払拭できなかったことも事実です。

そうすると、私たちが研究課題として取り上げた「人文学」は、そもそも何なのでしょう。問題とすべき対象自体が、不確実なものだとすれば、それが「危機」とされ、「再生」すべきものと言われることとなります。ふつうに考えたら、これはおかしいことであり、本末顛倒しています。そこで、本来の「人文学」とは何か。それは、どのように定義されるべきなのかという問いが立ち現れてきます。そ

の場合、歴史的に問えば過去へと遡り、哲学的に問えば本源へと向かうでしょう。いずれも、もっともなベクトルであると思われます。

しかし、いまひとつの道筋がありそうです。それは、「危機」とされ、「再生」が期待される対象が、なぜ「人文学」と呼ばれるのかということです。つまり、「危機」と「再生」の対象として、なぜ「人文学」が選ばれ、指名されるのかということです。たとえば、近年話題の地震学に「危機」と「再生」が叫ばれているとは聞いたことがありません。経済学や医学などについても同様です。もちろん、それぞれに深刻な限界や反省は多々あると思いますが、それが「危機」や「再生」に直結する事態であるという言い方に遭遇したことはありません。

今、このように比較してみると、現今の「人文学」の立ち位置がうかがえそうです。それは、蘇生を施さなければならない程に瀕死状態に陥っている「学」の代名詞が「人文学」であるというよりも、そのような致命的状態であることを人々がいかにも納得してしまう「学」の代名詞が「人文学」であるということです。その意味では、人々が「人文学」という確たる実体に「危機」と「再生」を感得するのではなく、人々が現に生きている自身とその歴史に対して懐く「危機」と「再生」の意識や感覚が、バーチャルな「学」としての「人文学」を作り出して、その「学」の「危機」と「再生」という形で代弁させているとみることができるといえるでしょう。したがって、本源的な問題は、人々自身とその歴史への「危機」観(感)と「再生」への望みにあると思われれます。

しかし、だからと言って、「人文学」が派生的な問題であるとは言えません。たとえ、バーチャルな「学」として創り出されるとは言え、そこに失望と期待が織り交ざって肥大化した、あるいは逆に萎縮化した複雑な「人文学」がかかげられているからです。これを不名誉ととるか名誉ととるかは自由ですが、少なくとも、「学」の遂行者は、このような「人文学」に責任を負うべきです。なぜなら、一面では、諸「学」との対比において不必要とされ、失効とされる「学」としての「人文学」。そもそも「学」たり得るのかと危惧される「人文学」。しかし、一面では、瓦解しつつある人々自身と、その歴史を再建するための方法として過剰に期待される「人文学」。「学」であってほしい、あるいは「学」になってほ

しい「人文学」が、諸々の対比と矛盾を抱え込みながら仮想されている現実があるからです。

では、本研究課題にかかわる私たちは、どうしたらよいのでしょうか。たとえば、既述のような「人文学」はバーチャルな「学」に過ぎず、日々の個別研究を誠実にすすめることこそが大切であると考えられることもできましょう。あるいは、そのような「人文学」はバーチャルなものに過ぎないとして、逆に反撃することもあり得ます。しかし、たとえ、「人文学」がバーチャルな「学」であるとしても、それを仮想させる本源的な必然性や矛盾を無視したままで、個別研究に専心したり、反撃したりすることは適切でないと思います。少なくとも、私たちは、このように肥大化し、あるいは逆に萎縮化するバーチャルな「人文学」と無縁である位置にはいません。むしろ、他に比して、きわめて近い立ち位置にあります。

ただし、問題視される「人文学」がバーチャルな「学」であり、そもそも「人文」用語自体が相対的かつ歴史的な概念であるとするれば、「人文学」や「人文」という実体を直接対象として吟味することは容易ではありません。と言うよりも、建設的な方法ではないでしょう。要は、バーチャルな「学」としての「人文学」がどうして生み出されるのかという現実を確かめながら、私たちが日常取り組んでいる具体的な研究課題のなかから考えていく以外に術はないと思われまます。また、それが現実的でしょう。

私自身の場合で言えば、歴史研究になります。その研究が、バーチャルな「人文学」の創出とどのような切り結び方をしているのか。あるいは、有意義な課題を選んでいるのか。実証することと観念論とは紙一重ではないのか。史料を事実とはき違えていないか。事実とはどのような類とレベルをいうのか。事実と思想の関係をいかに考えてきたのか。さまざまな懐疑が自覚されます。このような懐疑をそれぞれ真摯に確認していくことが、仮想される「人文学」の「危機」と「再生」に対処する建設的な道ではないでしょうか。

このような姿勢を基軸としながら、このたびの共同研究では、大学（とくに私立学校）制度と「人文学」設定との関係。大学へのアジア留学生からみた「人文学」の仮想。バーチャルな「学」としての「人文学」にくみした先人（津田左右吉その他）、など

を具体的な課題として、近代日本における「人文学」の仮想と、その「危機」と「再生」の意識・感覚の必然性や矛盾について一步踏み込んでみたいと考えているところです。